

☆四旬節第2主日(2月25日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (創世記 22章 1-2, 9-18 節)

その日、神はアブラハムを試された。神が、「アブラハムよ」と呼びかけ、彼が、「はい」と答えると、神は命じられた。「あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。わたしが命じる山の一つに登り、彼を焼き尽くす献げ物としてささげなさい。」

神が命じられた場所に着くと、アブラハムはそこに祭壇を築き、薪を並べた。そしてアブラハムは、手を伸ばして刃物を取り、息子を屠ろうとした。そのとき、天から主の御使(みつか)いが、アブラハム、アブラハム」と呼びかけた。彼が、「はい」と答えると、御使いは言った。「その子に手を下すな。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが、今、分かったからだ。あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげることが惜しまなかった。」

アブラハムは目を凝らして見回した。すると、後ろの木の茂みに一匹の雄羊が角をとられていた。アブラハムは行ってその雄羊を捕まえ、息子の代わりに焼き尽くす献げ物としてささげた。

主の御使いは、再び天からアブラハムに呼びかけた。御使いは言った。「わたしは自らにかけて誓う、と主は言われる。あなたがこの事を行い、自分の独り子である息子すら惜しまなかったので、あなたを豊かに祝福し、あなたの子孫を天の星のように、海辺の砂のように増やそう。あなたの子孫は敵の城門を勝ち取る。地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によって祝福を得る。あなたがわたしの声に聞き従ったからである。」

第二朗読 (使徒パウロのローマの教会への手紙 8章 31b-34 節)

皆さん、もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜(たまわ)らないはずがありませんか。だれが神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。

人を義としてくださるのは神なのです。だれがわたしたちを罪に定めることができます。死んだ方、否(いな)、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執(と)り成してくださるのです。

福音朗読 (マルコによる福音書 9章 2-10節)

そのとき、イエスは、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。イエスの姿が彼らの目の前で変わり、服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった。

エリヤがモーセと共に現れて、イエスと語り合っていた。ペトロが口をはさんでイエスに言った。「先生、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」ペトロは、どう言えばよいのか、分からなかった。弟子たちは非常に恐れていたのである。

すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がした。「これはわたしの愛する子。これに聞け。」弟子たちは急いで辺りを見回したが、もはやだれも見えず、ただイエスだけが彼らと一緒にいられた。一同が山を下りるとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまでは、今見たことをだれにも話してはいけない」と弟子たちに命じられた。彼らはこの言葉を心に留めて、死者の中から復活するとはどういうことかと論じ合った。

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

寒暖の差が激しいこの頃です。ですが、暖かい春ももうすぐです。幼稚園の庭のチューリップの花も葉っぱが大きく育ち、色とりどりの花が咲くのを子どもたちは楽しみにしているようです。これからは一雨降るごとに草花、木々は大きく成長します。私たちも毎年四旬節という恵みの季節を経て大きく成長できているのでしょうか。何もしなくても毎年やってくる四旬節と勘違いしていないのでしょうか。四旬節の恵みの時期をもったいなくも過ごしていないのでしょうか。

今日の日曜日のミサの朗読のテーマは、「神さまからの声」です。呼びかける神さまなのです。

第一朗読（創世記 22 章 1-2, 9-18 節）

創世記ではアブラハムの試練が読まれます。主なる神からの恵みで一人息子を授かったアブラハムに対し神はなかなか難しい試練を与えられます。せっかく授かった子を生贄としてささげよというものでした。授かったイサクを捧げよとは…。子孫が浜の砂のように、空の星のように増えるというのは聞き違いだったのか。しかしアブラハムは疑問を挟まず言われる通り実行しようとします。アブラハムにとって主なる神は絶対に自分のために良いことを考えておられるという強い信仰があったのです。神の愛を信じ切るということがアブラハムの信仰だったのです。

第二朗読（使徒パウロのローマの教会への手紙 8 章 31b-34 節）

使徒パウロは父なる神の人間に対する意気込みのすごさ、その範囲の広さについて述べています。太祖アブラハムの主なる神に対する信仰、すなわち自分の一人息子イサクを惜しまない信仰に対して、父なる神は人間を救うためにご自分の独り子さえ惜しまずに十字架に付けられることさえなされたと述べています。そのような強い愛を持った神が他にあらうかと述べているのです。イエスこそ父なる神の真の姿、真の愛の心を示してくださった方なのです。

福音朗読（マルコによる福音書 9 章 2-10 節）

タボル山でのご変容の場面です。この場面でイエスが洗礼を受けられた時と同じように天の父から「これは私の愛する子。これ聞け。」と声がしたのです。アブラハムやほかの預言者たちとは違い、イエスの時代からはイエスこそが父なる神の名代としての地位にあることをこの声は示しています。創造された全宇宙に対する権限すべてがイエスにあるのです。ですか

らイエスの言葉は御父の言葉でもあるのです。弟子たちはまだそこまで考えていなかったようですが、イエスの受難と十字架での死と復活こそが父なる神の本気度を示していたのです。



春はもうすぐです。(2021年3月)

P.S.

この度東京教区の菊地大司教様の来年度の人事発表がありました。これはサレジオ会の人事異動によるものですが、私、野口も三河島教会への異動となりました。5年間の足立教会での生活の間、皆さまには大変よくしていただきました。3年もの間新型コロナの為に思うように活動できませんでしたが、皆さまの信仰生活に少しでも貢献できたのであれば幸いです。3月31日(日)の復活祭まで務めますのでよろしくお願いします。

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光